

私の名前はクラウ・P・ブラン。

見た目は高校生に間違えられるけど、まだ小学六年生。

趣味は読書。

性格はおとなしい方で、しゃべるのはあまり得意じゃない。

周りからはクールだと思われるけど、実際には無口なだけの普通の女の子。

大丈夫、まだ意識ははっきりしている。

けど、この状態が何時まで続くか判らないから、この記録を残しておこうと思う。

数日前から不思議な夢を見るようになった。

夢の中の私は恐竜——ティラノサウルス型の巨大な戦闘機械獣で、要約すると『意志を持って生きるきたロボット』みたいな存在になっている。

戦闘機械獣には意志があるけど、自分だけじゃ自由に動けないらしく、操縦してくれる搭乗者を必要とする。

私の搭乗者はハンだった。

ハン是我的小学校のクラス担任で、私の親戚のお兄さんで、そして——私の好きな人。

夢の中の私とハンは『人機一体』と呼べる関係で、どんな敵と戦っても負ける事はなかった。

戦闘機械獣の私は高性能で、搭乗者のハンも優秀な操縦技術を持っていて、相性も抜群だった。

荒唐無稽な夢だけど、それでもハンのベストパートナーになれるのは嬉しかった。

それは現実では叶わない事だから。

私はハンが好きだけど、彼とは歳が十歳も離れていて、彼にとっての私は『親戚の妹みたいな子』でしかないから。

その夢を見るようになってから、私は自分の感情がコントロール出来なくなっていた。

ハンが好き。

ハンにも私の事を好きになってほしい。

そのために邪魔な人間を消してしまいたいと思ってしまう。

自分の願望を抑えきれなくなっている。

自分の感情を制御出来なくなっている。

記憶に欠落がある。

からだ  
身体に違和感がある。

けが  
怪我をしているような気がするけど、身に覚えはなく、その部位を調べても、傷や痛みはない。

私は五体満足だけど、この違和感は幻フアントムペイン肢痛に近いのかもしれない。

けど、これが『意識のない間に怪我けがをして、それが何事もなかったかのように治療された結果』で、それに対する違和感だったとしたら……。

そんな事はありませんけど、そうであってもおかしくないと、今の私は思ってしまった。  
記憶の欠落があつて、身体に違和感があつて、情緒不安定な状態だから。

正体の判らない不安。

それは——怖い。

学校をもう二日も休んでいる。

こんな状態では登校でき出来ない。

何か、とんでもない事をしてしまいそうで。

友達に会いたい。

ハンに逢あいたい。

明日は学校、行けるといいな。

サイドストーリー #07

『ギャクサツソウリュウ』

「ぐ………がああああああああああああああああああ——ッ！」

突如、耳を塞ぎたくなるような絶叫が響いた。

けど、それは叶わない。

それは『私』の声だけど、それを聞いている私は耳を塞げない状態だから。

『私』は白いラインが入った黒いドレスみたいな服を着ていて、機械みtain白い剣を何本も突き刺されて、公園の樹木に磔はりつけにされていた。目の前には、赤いラインの入った黒い和服を着た、高校生くらいの女の子がいて、手には『私』を磔はりつけにしている剣と同じものを持っている。状況から考えて、彼女が『私』を磔はりつけにした張本人だと思う。

……状況が飲み込めない。

こうして落ち着いて周りの様子を見ていられるのは、今の私は意識だけの存在で、自分の身体からだの中なかにいるのはなんとなく判るけど、感覚を共有していない状態だからだと思う。でなければ、痛みで意識を失うか、発狂しているはずだから。どう見ても、『私』の身体はそのレベルの状態だ。

身体を動かそうとしてみても、まるで反応しない。誰かにコントロールを奪われているような感覚……。

状況に戸惑っていると、和服の少女が動いた。磔はりつけにされた『私』の太ももに突き立てた機剣を、いたぶるように何度も捻ねじった。

「悪足掻あがきを」

和服の少女が言うと、彼女の周りに浮かんでいた無数の機剣が『私』に殺到した。それらは『私』自身じゃなく、『私』の背中で稼働しようとしていた『機械の羽根』を串刺しにし、その機能を破壊し尽くした。

「さて——そろそろ仕舞しまいにするか」

動けず、完全に戦意を失ったらしい『私』に興味をなくしたように、和服の少女は言った。左手に持っていた機剣を右手に持ち替え、その切っ先が『私』の急所——心臓に向かう。トドメを刺すつもりなのだろう。

「……」

「やめてください！ それ以上は、クラウさんが死んでしまいます！」

物陰から姿を現した女の子が、和服の少女を止めた。見た目は私と同年代くらい。やみひめと同じくらいの身長だから、小学校の高学年くらいだろうと思う。セミロングの黒髪を左側で結んだサイドポニーにしている、瞳の色は澄んだ青。可愛らしい外見で、パッと

見は普通の女の子だけど、こんな時間に何をしていたんだろう。もう夜も遅い時間に、人気のない公園なんかで。

そういえば、さっき『私』の事を名前で呼んでいた。見覚えはないけど、同じ学校の子なのかな……？

「……なんのつもりだ？」

和服の少女と何事か言い争っていた女の子が、『私』を背に庇うように立ち塞がっていた。和服の少女から『私』を護るみたいに。

よく聞き取れないけど、女の子は和服の少女を説得しているみたいで、だけど和服の少女はそれを聞き入れず、手にした機剣を構えた。『私』より先に、邪魔な女の子を排除するつもりだ。

駄目。

この子を死なせちゃいけない気がする。

『私』を庇ってくれているからというのもあるけど、『助けなきゃいけない』と、自分の中で何かが叫んでいる。

「ではな——」

和服の少女の凶刃が振り降ろされる。

女の子は逃げない。

私からは背中しか見えないけど、きつと気丈な表情をしていて、恐怖で目を閉じたりはしていないんだと思う。

この子は多分、とても強い女の子だから。

そんな子を死なせていいはずがない。

動け。相手の喉笛を食い千切れ。折れていても、その爪を突き立てろ。

——『ギャクサツソウリュウ』の名が伊達じゃないのなら。

「くっ……まだ足掻くか！」

和服の少女が忌々しげに悪態を吐く。樹木に標本のように縫い付けられていた『私』が、束縛を破り、反撃に転じようとしていたからだ。

けど、それは私の意に反していて。

「がああああああああああああああああああああああああああああああ——ッ！」

獣のような雄叫びを上げ、『私』は和服の少女ではなく、『私』を庇ってくれた女の子を害そうとしていた。

悪夢のような一夜が明けた。

私は一睡も出来ず、じっと身体を丸めてベッドの中にいた。そうしていないと、震えが止まらないから……。

あの後、『私』の攻撃から女の子を救ったのは、和服の少女だった。身を挺して女の子を護り、彼女を背に庇い、『私』を牽制するように機剣を向けた。

状況不利と判断したのか、それとも、私の声が届いたのかは判らないけど、『私』はすぐにその場から撤退した。

去り際に一瞬見せた和服の少女の悲しげな表情は、私のよく知る友達のもの、ひどく似ている気がした。

あの和服の少女は何者なのか。

『私』を庇ってくれた女の子は誰なのか。

判らない。

だけど、判った事——違う、思い出した事はある。

ここ数日の欠落した記憶だ。

覚えていない間、『私』が何をしていたのかを知ってしまった。

信じたくない。

だけど、事実だと判ってしまう。

私の意思でやった事じゃないけど、やったのは間違いなく『私』だから。

「……………」

どうして、こんな事になってしまったのか。

発端は月曜日ほったんの放課後だ。いつも通り、やみひめと一緒に下校して、彼女と別れてから、私は誰かに呼ばれた気がした。

助けを求める声が聞こえた気がした。

引き寄せられるように声の発信源に行くと、そこは人気のない場所に建った廃ビルで、私を呼んだそれは、よく判らない『なにか』だった。ただ、それが生き物で、意志のようなものを持っている事は、なんとなく理解出来た。

『なにか』はひどく弱っていて、私に助けを求めた。私はそれを放っておかず、了承してしまった。私は直後に、その時の出来事を忘れ、どうしてあの場所にいたのかも覚えていなかった。記憶に欠落が出始めたのは、この時からだった。

しかし、昨夜の出来事のショックのためか、私はすべてを思い出した。事の始まりから、今日までの事を。たった数日——月曜の放課後から、昨夜までの三日間の、記憶の欠落した期間に犯してしまった過ちを……。

——私は人を傷付けてしまった。

昨夜と同じ姿で。両手に持った禍々しい爪で。自分に都合の悪い相手だからという理由で。

私は自分の好きな人の大事な人を殺そうとした。

その人はハンの大学の後輩で、とても感じの良い女性だった。髪が短くて、どこか中性的な雰囲気だから判りにくいけど、とても綺麗な顔をしていた。ハンは気付いているか判らないけど、私は気付いてしまった。

きっと、この人はハンの事が好きなんだと。

それが、すごく嫌だった。

嫌だと感じる自分自身も嫌だった。

だけど、そう思う気持ちは止められなかった。

きっと二人はお似合いで。

彼女が告白してしまえば、ハンはそれを断らない。

ハンも彼女を憎からず思っているはずだから。

彼女を私に紹介してくれた時のハンの様子を見ていれば判る——判ってしまう。

私に勝ち目なんてない。

周りからは大人っぽいと言われていても、本当の私は普通の小学生だから。

もっと大人になれば、ハンの目から見ても『妹』だなんて思われなくらい大人になれば、私にもチャンスがあると思っていた。

でも、そんな猶予はなかった。

そうなる前に、彼女は私からハンを奪ってしまう。

そんなのは……嫌だ。

「……………そうだ。それで、私がやったんだ——」

あの時の事を思い返し、私は更に身を縮こませた。

彼女の大学の近くで待ち伏せて、後を尾けて、ひとけ気が絶えた瞬間を狙って——

「——っ!？」

気持ち悪い。胃液が逆流しそうな不快感。それを必死で抑えようとすると、余計に気分が悪くなる。

どうして、あんな恐ろしい事をしてしまったのか。魔が差しただけじゃない。普通は考えても行動には移さない。人間には理性があるし、私は小心者だから。

私の理性の箍たがを外したの……？

心当たりはある。私に助けを求めた『なにか』だ。

言語とは違う手段で意志の疎通を行うから、言葉による誤解が生じず、本心が伝わる。だけどそれは、隠しておきたい本音まで伝わってしまうという事。

あの『なにか』は、助けてくれた対価を払おうとしてくれていた。でも、私は何も要求しなかった。見返りが欲しかった訳じゃないし、対価を受け取る事で、逃げ道を失ってしまう気がしたから。

だけど『なにか』は、私がひた隠しにしていた願望に気付いてしまった。私に、『いなくなればいい』と思っている人間がいる事に。そして、それを叶えようとしてしまった。

その結果——私は人を傷付けてしまった。

違う。殺そうとしたんだ。

殺そうとして出来なかっただけ。

今もあの人は病院のベッドで生きている。

……生きている？

「——駄目！」

私、今、何を考えたの……？

——生きているなら殺さないと。

駄目！

——邪魔な人間は消さないと。

駄目！





## あとがき

どうも、るとおめさ流遠亜沙です。

『ゾイヤミ』サイドストーリー#07をお届け致します。

今回は『ゾイヤミ』のサブヒロイン、だけどあんまり出てこない控えめな女の子——クラウ視点のお話でした。時間軸的にはサイドストーリー#06の後半から、本編・第十三話の間となります。

ヤンデレです。

新年一発目の長編（これ自体は掌編ですが）が、これでいいんでしょうか。いいんです——だって僕はメチャクチャ楽しいから。

元々、クラウは紙白さんのお嬢さんで、あくまでゾイドなので、ハンとくつついたりはしない訳ですが、搭乗者のハンに対して秘めた想いがあったりするんじゃないかなろうか——という妄想を紙白さんには迷惑なくらいしています。

はい、僕はクラウに想い入れが強すぎます。

なので、『ゾイヤミ』では原作準拠では出来ない事をやります。もちろん、紙白さんの許可を得た上でですが。

では、よきところで謝辞を。

ここまで読んでくださった『あなた』と、チェックをしてくださった紙白さんに感謝を。ありがとうございます。

次は本編です。決戦です。腕の一本くらいは覚悟してね☆

2016 / 1 / 6 流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ジイカルやみひめ The NOVEL XXXXXX』小説ページに戻る